HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	平和創出観光に関する研究 : パレスチナにおけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムを事例として［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	高松, 郷子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第14223号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79890
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kuniko_Takamatsu_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：高　松　郷　子

審査委員	主査　教授	山　村　高　淑
	副査　教授	山　田　義　裕
	副査　教授	西　山　徳　明
	副査　准教授	岡　田　真　弓
	副査　北海道博物館長	石　森　秀　三

学位論文題名

平和創出観光に関する研究

パレスチナにおけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムを事例として

本論文は、住民が暴力に頼らず平和を目指す「平和創出」の方法としてコミュニティ・ベースド・ツーリズム（以下、CBT）を位置づけ、観光を通した平和創出を実現していく上で、地域社会が直面している諸課題、ならびに地域社会・国際社会双方が考慮すべき制約要因や構造的課題について、緻密な現地調査を実施して得たデータに基づいて分析・論証したものである。具体的には、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区9県における、パレスチナ住民によるCBT関連諸活動を具体的事例として取り上げ、長期間・複数回にわたる現地での聞き取り調査ならびに参与観察を通して詳細に亘るデータを収集し、それらを分析することで、大きく以下の四点を実証的に明らかにしている。

第一に、CBTの取り組みが、パレスチナにおいて孤立させられたコミュニティと外界、パレスチナ内部で分断された人々のつながり、といった社会的関係性の再構築に貢献していること、そしてその結果、失われつつあるパレスチナの伝統や文化の保護に対する支持者の拡大につながっていることを明らかにした点である。

第二に、CBTに参加することで、ツーリストの側に、現地についての体験に基づいた知識の生産が行われていることを、「責任ある観光」の視点に基づいて明らかにした点である。具体的には、CBTへの参加を通してツーリストがパレスチナに対するネガティブなイメージを払拭していくプロセス、さらにはツーリスト自身が旅行終了後に自国でパレスチナにおける実体験を家族や知人に語り、パレスチナへの支援活動を開始する現実を丁寧に描き出し、「責任ある観光客」としてツーリストが平和創出の担い手になり得ることを指摘している。

第三に、CBT が果たした役割を多面的に分析することで、CBT が結果として、対外的にはツーリストの目を通した「国際的な平和監視機能」として作用していること、パレスチナ内部においては行政や福祉が行き届かない地域に、社会福祉、雇用対策、人材育成など、社会開発の機会・制度を創出する仕組みとして機能していることを明らかにした点である。さらに、構造的暴力を構成する貧困や格差を CBT により解消することの可能性や、一般の人々が実践することのできる民主的平和創出の手段としての CBT の可能性についても詳細な検討を行っている。

第四に、CBT の主体となるコミュニティについて、「地縁社会」以外に 5 つのカテゴリーのコミュニティが存在することを実証し、CBT のより汎用性の高い理論的枠組み構築をなし得た点である。5 つのカテゴリーとは、「信条・信念の縁」「民族・伝統文化の縁」「入植地・分離壁の縁」「自然・環境の縁」「経済の縁」である。従来の CBT に関する議論では地縁社会のキャパシティ・ビルディングと自律性の発露がその論点の中心であったために、本論が提示した 5 つの縁に基づくコミュニティについては論じられてこなかった。この点は学術的に大きな貢献である。

このような成果を踏まえ、審査委員会は、本論文が大きく以下の二点において学術的に新規性、独創性があることを高く評価した。すなわち、

第一に、本論文には筆者が直接現地で収集した一次情報がふんだんに盛り込まれており、極めて高い資料的価値を有する点である。従来観光学分野においては、政治的に不安定な地域や軍事的占領が継続している地域における観光活動を対象にした研究は極めて少なく、さらにパレスチナ観光に関する研究は少ない状態である。本論文は、これまで学術的に十全に扱われてこなかったパレスチナにおける CBT について、極めて貴重かつ有用な情報・知見を収集・分析したものとなっており、学術的貢献度の面で国際的にも高く評価しうるものである。

第二に、本研究は以下三つの関連する学術研究分野における既存の議論を踏まえた上で、それらに新たな枠組みを提示することに成功している点である。すなわち、CBT 研究、平和学をベースとした応用的観光研究（文化的安全保障としての観光に関する研究）、開発学（社会開発論）である。さらに、それらの接合領域を「平和創出観光」という新たな応用研究分野として提示することに成功している点において、新規性、独創性の面で高く評価することができる。

一方、審査委員会においては、本論文の限界性として、コミュニティにかかる概念、CBT にかかる概念の整理が限定的であり、議論にまだ発展の余地があること、また、何をもって平和とみなすかという「平和」そのものの定義についても議論の余地があること、などについて指摘がなされた。

今後の課題を残している点は否めないが、本論文は博士論文として十分な水準を満たす内容を備えており、提示された知見や考察結果は、今後の観光学ならびに平和学に新たな視座を先駆的に提示したものとして高く評価されるべきものである。

以上を踏まえ、著者は北海道大学博士（観光学）の学位を授与される資格があるものと認める。